

NEWSLETTER

～ 目次 ～

- ◆ アクティブラーニングニュースレター(p.1)
- ◆ アクティブラーニングとは? (p.1)
- ◆ アクティブラーニング部門活動報告
 - ・ アクティブラーニング型授業モデルの開発 (p.1)
 - ・ ワークショップの開催(p.3)
- ◆ お知らせ
 - ・ アクティブラーニング手法の詳細について公開しています(p.5)
- ◆ アクティブラーニング部門とは? (p.5)

◆ アクティブラーニングニュースレター

学習効果を高める方法の一つとしてアクティブラーニングがあります。アクティブラーニングはKALS（駒場アクティブラーニングスタジオ、東京大学 駒場キャンパス 17号館 2階）といった特別な設備があるところで行うこともありますが、通常の教室でも行えます。授業の一部にアクティブラーニングをとり入れる際に、参考になるように、本ニュースレターでアクティブラーニングのさまざまな方法や関連する話題をお知らせいたします。本ニュースレターをお読みになり、気になる記事がありましたら、アクティブラーニング部門までお問い合わせください。（星埜）

◆ アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングとは、データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習のことです。

講義でのインプットに対して、試験や課題でアウトプットすることは普段から行われていると思いますが、それだけで深い理解を獲得させるのはなかなか困難です。アクティブラーニングでは、その途中に読解・ライティング・討論など、学生が中心になって行う活動を取り入れることにより、より深い理

解を獲得させるものです。一人で読んだ時は気がつかなかった観点を他の学生の見方から知ったり、他の学生の発表に質問することでより広がりをもって問題を捉えることができるようになります。

単に討論をすればアクティブラーニングになるわけではなく、どのように進めれば有効かについてさまざまな知見があります。このニュースレターでは、そのような方法をいくつか紹介していきます。（星埜）

◆ アクティブラーニング部門活動報告

2021年度のアクティブラーニング部門の活動について、これまでの取り組みを紹介します。

アクティブラーニング型授業モデルの開発

アクティブラーニング部門では、授業の開講を通して、アクティブラーニング型授業のモデル開発や試行を行っています。

2022年度Sセメスターは、3授業を開講しました。各授業の概要やアクティブラーニング型授業モデルについて得られた知見を簡単に紹介します。

.....

**(1) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習:
SDGsを学べる授業をつくろう**

.....

一昨年度から開講しているこの授業の目的は、SDGsについて高校生が効果的に学べるオンライン授業を設計してみることで、SDGsについての自分自身の学びを深めることでした。

今年度は授業の進め方を変更し、「第1部：SDGsを学ぶ」において、SDGsの全体像を把握する授業回を設けました。具体的には、第2回授業において、SDGsの各目標とターゲットを確認した後、各目標やターゲットの関係（結びつきの強弱）と理由を考えて個人で書き出し、それをグループで共有して関係性を話し合っして示しました。さらに、関係性を参考にしながらSDGsの意義と課題について議論し、内容をクラス全体で共有しました。第3回授業では、SDGsの17の目標間の関係を再考することを目的としました。17（も）の目標が定められた経緯を踏まえた上で、17の目標間にどのような関係性が

あるのかを複数の観点から示した図を引用しつつ、説明しました。また、17の目標間にシナジーやトレードオフがあるかどうかをグループで考えました。第4回授業では、SDGsの特定の目標について理解することを目的に、目標1（貧困をなくそう）と目標10（人や国の不平等をなくそう）に焦点を当てました。貧困や不平等の現状をデータで確認した後、そうした事態を招いている原因や、対策としての開発援助のありかたについてグループで議論しました。「第2部：SDGsを教える」では、第5回～第12回の授業で、高校生がSDGsについて学べる授業をつくり発表しました。また最終回では、最終発表に対する相互評価の結果をグループごとに確認し、自らの学習成果物の内容について振り返りました。また、この授業の学習目標である、SDGsの背景・意義・課題についてグループに分かれて考えを整理しました。その後、13回の授業を通した一人ひとりの学びを振り返る時間を設けました。

授業終了時の学生たちの感想では、「授業前は、SDGsに対して「何となく良いもの」という印象を持っていたが、もちろん意義はある一方で、さまざまな課題点も孕むものであるということに気付かされた」等が見られ、学生たちなりに、SDGsに対する考えに変化があり、また学習目標である意義と課題についての理解が深まったようです。

より詳しい内容は、ウェブサイトをご覧ください。<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/classes/class-report/a3555/>（中澤）

(2) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習： 未来の学びを考える【文献講読編】

2021年度Aセメスターより開講している授業です。2022年度Sセメスターは「文献講読編」として、教育・学習に関する文献を読み、文献の内容や自身の経験（過去・現在）の意味を理解した上で、「未来の学び（10年後を想定）がどうなるか」について自分なりに考えることを目的としました。

本授業は、大きく三つの内容・活動から構成されています。(1)学習前の準備では、「未来の学び」プレ議論として、「10年後の未来（の学校）では、①生徒は、何を身につける必要があるか？、②教師は、どんな役割を担うのか？、③地域・社会、家庭・保護者、学校・生徒との関係は？」について、ワールドカフェ形式で議論を行いました。(2)文献講読と「未来の学び」議論では、未来の学びを考える手がかりとなる情報を集めることを目的として、教育・学習の文献をジグソー法で講読し、未来の学びに関する問いについて議論を行いました。(3)「未来の学び」を考えるでは、これまでの自身の経験や文献・議論の内容を踏まえて一人ひとりが「未来の学び」に関する自分の考えを深めていきました。レゴブロックを使った経験の可視化や文献の内容との関連づけ（詳細はこちら <https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/tips/almethod/a3268/>）、ワールドカフ

ェ風のグループディスカッションを行いました。この授業の最終的な学習成果物は、全授業終了後に提出してもらったレポートでした。第13回の授業は、最終成果物に向けた状況共有として、その時点で考えている未来の学びを各自が発表し、相互にコメントしあいました。その後、13回の授業全体の振り返りとして、各自が大福帳を見直し、「13回の授業を通じて、自分は何ができるようになったのか」を一人ひとりが考え、内容をペアで共有して、授業を終えました。

受講者の感想では、「第11回、第12回のワールドカフェ風ディスカッションは、自身の未来の学びを考えるのに役立った」について、「とてもあてはまる」6名、「あてはまる」2名でした。加えてワールドカフェ風ディスカッションへの感想を自由記述で聞いたところ、「たくさんの意見を短時間で効率よく収集できること」、「一つの問いに対しても、各セッションにおける他の議論を活かすことができたのが良かった。」といった肯定的なものがあつた一方、「表面的な乾燥に終わってしまうことも想定される（原文ママ）」、「自分と同じタイミングで司会をやる人の意見が聞けなかったり、別グループの人とのディスカッションができなかったりと、文字通り全員の意見が聞けなかったのが少々物足りなかったです。」といった改善点が挙げられました。特に今回の授業では、受講者が8名と少人数だったため、ワールドカフェ風ディスカッションの利点を最大限に活かすことができませんでした。次に実施する際は、セッション数を増やしたり時間を長くとする等の改善を行いたいと考えています。（中澤）

(3) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習： 模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成 I

2019年度より開講している本授業では、「模擬国連（Model United Nations）」というアクティブラーニングの手法を用いて、国際問題について考えました。多様な利害・価値観に配慮することの重要性を理解するには体感してみることが早道ですが、模擬国連の会議では、一人一人が米国政府代表や中国政府代表などの担当国になりきって国際問題について話し合い、決議案の作成や投票を行いません。立場を固定されている点ではディベートと同様です。しかし、相手を論破することで勝利を目指すディベートと異なり、模擬国連会議では合意形成が目的であるため相手の利害・価値観を尊重したうえでの妥協が重要になります。

この点を重視し、授業内では対立の激しい議題（2003年のイラク戦争直前、2017年の朝鮮民主主義人民共和国による核実験時の国連安全保障理事会）・担当国を設定して、ロールプレイ・シミュレーションに取り組みました。具体的な授業の流れは、部門ウェブサイトをご覧ください（<https://>

ワークショップの開催

学内外へのアクティブラーニングの普及を目指して定期的にワークショップを企画しています。

2022年度はこれまでに3つのワークショップを開催しました。これらについて簡単にご報告します。なお、詳細については、部門 web サイト (<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/event/>) をご覧ください。

ワークショップ「第3回東大生がつくるSDGsの授業」(2022年8月29日)

アクティブラーニング部門では、2022年度Sセメスターに、全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習「SDGsを学べる授業をつくろう」という授業を開講しました。本イベントは、その授業の中で特に優れた授業案を設計した学生が、高校生を対象とした授業を実施するものです。2020年度から開催しており、今回が3回目の開催となりました。当日は、10名の高校生が画面越しに集いました。

受講者代表による授業「貧困ってなに？知らないことは解決できない」(宮部裕貴 教養学部2年)

SDGsの目標1「貧困をなくそう」に関する授業でした。①貧困の現状を具体的な指標で説明できる、②現在取られている解決策の長所・短所を述べられるようになる、③以上を踏まえて、個人でも実践可能な貧困解決策を提示することができるようになる、という3つの目標を達成するべく、講師からの問いかけに対して参加者が1人あるいはグループでGoogleフォームに記入し、講師がそれにフィードバックをするという双方向的な形で進められました。授業を実施した学生からは、実施後に次のような感想が寄せられました。

授業準備に関しては、「知っている」ことと、それを「教える」ことの隔たりの大きさを痛感しました。当初は可能な限り多くの知識を伝えるのが良い授業だと思っていましたが、必ずしもそれが正解とは限らず、生徒の目線から授業内容を見つめ直すことの必要性を学びました。こうした受け手の視点も勘案する姿勢は、授業に限らず、情報伝達全般において、今後とも意識していきたいです。

授業では、高校生の方々の発想力・思考力にとっても驚きました。実際、高校生の皆さんには、授業の最後に「個人でも実践可能な貧困解決策の立案」という、この授業の最終目標でもある課題に取り組んでもらったのですが、そこであがった解答は、私の解説を反映しつつも、私も想定していなかったような視点が加えられた素晴らしい案ばかりでした。授業後に頂いた感想でも、この授業を通して新たに知ったことや生じた疑問を挙げて頂き、参加者の方々のSDGsに対する関心を少しでも深めることができたのだと達成感がありま

Policy Paper I ~ 「イタイコト」を見つけるために~

Country: China
Name: _____

1 【内政】

(1) あなたの担当国には、大量破壊兵器やテロ、人権侵害に関して指摘されている事例があるか？

・人権侵害→共産党一党独裁体制を取っており、言論や思想の自由を大幅に制限しているとの指摘が国内外からある。異論を唱える人民のみならず、国内の少数民族などに対しても深刻な人権侵害を行っているとのこと。

・大量破壊兵器→大量破壊というほどではないにしても、南シナ海での軍事行動など、周辺国に対して軍事的圧力をかけることが多い。制裁にも関わらずNKが核実験を行えるのはChinaが決議通りの制裁を厳格に履行していないからだと言われている(石油については2013年以降ほぼ同量を供給し続ける)。

・直接(1)には関係ないが、~2008年の六者協議を主導していた実績あり。1

(2) (1)での回答を踏まえ、あなたの担当国は、国際社会の大量破壊兵器やテロ、人権侵害に関する関与・介入に対して、一般的にどのような姿勢を示すべきか。

・人権侵害については自国への非難を防ぐためなるべく言及しない。

・直接(2)には関係ないが、国際社会におけるプレゼンスを強めたがる

2 【外交政策】

(1) あなたの担当国は、これまでのDPRK関連の会議において、どのような態度をとってきたか？

・北朝鮮への配慮=強力過ぎる制裁は行うべきでなく、対話路線強調(「決議違反の連続でNKは対価を支払うべきだが、制裁・圧力は根本的解決にならない」)

・1・2回目は比較的緩い対処だった一方、3回目以降は圧力強化

背景:

①2回目の核実験の際の経済制裁で、中国外交部は、「大量破壊兵器及びその運搬手段に断固反対し、安保理決議に厳格にしたがい、拡散防止と輸出規制のための法整備を行っている」と述べたにもかかわらず、湖北省の中部企業から兵器運搬車の車両が北朝

会議前に準備するPolicy Paperの例

履修者の感想としては、次のものがありました。

- ・ 議題についてはもちろんのこと、自分がその国の立場で意見を言わなくてはならないため、担当国について詳しく調べることに繋がった。
- ・ 国際関係論や国際法で学んだことを模擬国連の場で活かすことによって学びが深まったので、かなり学習効果があったと思います。
- ・ 達成したいことの優先順位をつけ、場合によっては最優先事項を通すために他の事項を諦める手法は様々なことに応用できそうだと考えた。また、決議案を書く中で、あえて通らなそうな要求を先に提示することで譲歩の材料にすることの有効性も学べた。
- ・ いかに拒否権を使わせないラインまで妥協を引き出せるかが大事だと思った。自分側のボトムラインと同様に相手側のボトムラインについても考慮する必要がある。会議においては伝えたい要点が相手にしっかり伝わる話し方をする必要がある。早口になったり自分の知識をひけらかすような話し方では議論を進めるといった観点においては意味がないと思った。

本授業の目的に関し、国際関係の知識定着・合意形成の技能習得の両面において一定程度達成されていることがうかがえ、安堵しています(中村)

した。準備も含めて「授業」することは大きな苦
労が伴うなど感じましたが、一方で、自分自身の
成長や受講者の方の反応も勘案すると、それだけ
の価値は十分にある喜びだと思いました。

参加者の高校生からの反応も肯定的なものが多
く、授業を実施した学生の感想とあわせて、「教え
ることで学ぶ」という授業・ワークショップの所期
の目的が一定程度達成されていることがうかがえた
次第です（中村）

第5回模擬国連ワークショップ（2022年9月9日）

本ワークショップは、先述の全学自由研究ゼミナ
ール／高度教養特殊演習「模擬国連で学ぶ国際関係
と合意形成」を踏まえて開催したものです。学内外
の大学・高校教員を対象として2019年度から開催
しており、今回が5回目となりましたが、37名の参
加者が画面越しに集いました。

ワークショップは2部構成としました。セッション1「模
擬国連導入事例から学ぶ」では、模擬国連
の概要と本学教養学部の授業への導入例について、
担当教員の中村長史と受講者代表の八尾佳凜（教養
学部4年生）、竹本陽（教養学部2年生）の両学生
からお話した後、模擬国連の効果的な導入方法につ
いて参加者をまじえて議論しました。模擬国連はあ
くまでも手段であり、導入目的を明確化する必要が
あるという点を再確認する機会となりました。



セッション1の様子（授業担当者・受講者の説明）

セッション2「国際機関での実務から学ぶ」で
は、富田早紀氏（The Global Fund to Fight AIDS,
Tuberculosis and Malaria; 元国際移住機関[IOM];
本学総合文化研究科・教養学部 OG）から、複数の
国際機関での実務経験に基づいて、国際機関で必要
とされる知識・技能・態度についてご紹介いただき
ました。模擬国連で学ぶ知識・技能・態度が実社会
でどのように役立ち得るかの一例を学ぼうという趣
旨でしたが、セッション1との関係を意識した富田
氏のお話のおかげで、模擬国連の特徴を改めて確認
する機会ともなりました。



セッション2の様子（富田氏のお話）

参加者からは、以下のような感想があり、本ワ
ークショップの目的が一定程度果たされていること
に安堵しました。

- ・ 内容が分かりやすくとても興味深く感じまし
た。具体的な説明や事例紹介もあり、多くの
情報を教えて頂きました。実際に参加した学
生からの話もあったのが良かったです。
- ・ Policy Paper がとても参考になりました。一
から主張をまとめるのは難しいのですが、こ
れに則って考えをまとめてみようと思いま
す。
- ・ 模擬国連について疑問に思っていたことをわ
かりやすく説明してくださり、腑に落ちまし
た。具体的には、所与の国益に制限されてお
り、革新的な議論がしにくいということだ
です。ロジックが成り立てば、担当国の政策や
立場を少し変えてもよいという点になるほど
と思いました。また、Policy Paper のフォー
マットについて、これまで見たことがあるも
のに比べて、論点の整理・政策を考える上
で、非常にわかりやすかったです。

次回は2023年3月に実施予定です。是非ご参加
ください（中村）

駒場アクティブラーニングワークショップ「授業 をアクティブにするためのふり返し」（2022年9 月14日）

本ワークショップは、学内の教員を対象として、
「アクティブラーニングのための授業デザイン確認
シート」（[https://dalt.c.u-
tokyo.ac.jp/download/a3321/](https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/download/a3321/)）に基づいて、授業の
デザインをアクティブラーニングの観点からふり返
り、参加者どうしで共有し授業をアクティブにする
ための検討やより良い授業にするための意見交換を
行うことを目的としました。当日は、5名の方にご
参加いただきました。

ワークショップでは、趣旨説明や参加者どうしの
自己紹介の後、まず授業づくりのステップとして、
学習目標の立て方や、あわせて評価方法も決めるこ

と、その後に教え方を検討するという流れを確認しました。次に、「アクティブラーニングのための授業デザイン確認シート」の「授業をつくる前」の箇所に、参加者自身が授業のデザインについて記入しました。休憩を挟んで、アクティブラーニングの定義についてのミニレクチャ、アクティブラーニングの手法や授業をアクティブにするための工夫や取り組みに関する参加者による議論・共有、アクティブラーニングのためのポイントや授業構成の仕方のミニレクチャを行いました。それらを踏まえて、「アクティブラーニングのための授業デザイン確認シート」の「授業をつくりながら」に参加者一人ひとりが検討した内容を記入し、グループごとに共有や相互コメントを行いました。グループワーク後はワークショップ全体をふり返り、最後に閉会の挨拶を行ってワークショップを終えました。

ワークショップ後のアンケートでは、「本ワークショップで扱った内容をご自身の授業に活用できると思いますか」、「本ワークショップによって、今後の授業をアクティブにできそうですか」という質問に対して参加者全員が「とてもそう思う」と回答くださいました。加えて、本ワークショップで学んだことをどのように活用しようと考えているかという質問について、学生が一人で考える時間をもう少し与えたいや、小テストやワークを Google ドキュメントに書き込むといった具体的な回答がありました。また、「アクティブラーニングのための授業デザイン確認シート」の改善点も挙げられましたので、今後はシートを改善し第2版を公開したいと考えています。（中澤）

◆ お知らせ

アクティブラーニング手法の詳細について 公開しています

アクティブラーニング部門ウェブサイト (<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/>) では、授業で活用可能なアクティブラーニング手法について、授業前の準備や授業中の運営といった具体的な手順などを紹介しています。また実際の導入を踏まえての感想や改善についても発信しています。ぜひご覧いただき、授業でのアクティブラーニングの参考になれば幸いです。

◆ 今後の活動予定

2022年度 A セメスターも授業を開講し、引き続きアクティブラーニング型授業モデルの検討・開発を行っています。また年度末に再びワークショップを開催する予定があります。オンライン授業や部門の活動に関する情報は、アクティブラーニング部門ウェブサイト (<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/>) で発信していきますので、ぜひご覧いただければと思います。ワークショップへの参加もお待ちしております。

◆ アクティブラーニング部門とは？

アクティブラーニング部門は学部教育を教育工学の視点から支援することを目的として、2010年度に教養教育高度化機構に設置されました。その活動内容は、教養学部・情報学環・大学総合教育研究センターの共同プロジェクトとして2007-2009年度に実施された文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)「ICTを活用した新たな教養教育の実現-アクティブラーニングの深化による国際標準の授業モデル構築-」を継承し、発展させています。また、全国の教育機関や教育関連の企業からの見学を受け入れており、アクティブラーニングの実施モデルとしての役割も果たしています。

(奥付)

- 発行年月日：2022年12月14日
- 発行：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 附属教養教育高度化機構アクティブラーニング部門
星埜守之・中澤明子・中村長史
- 連絡先：dalt@kals.c.u-tokyo.ac.jp
- Webサイト：<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/>